宇治拾遺物語

十四

へ 12
4108
14

へ12
4108
巻 14

宇治拾遺物語巻第十四目録

一 海雲比丘才子童比事
二 寛朝僧正勇力事
三 経頼蛇ノ子産事
四 魚養比事
五 新羅國后金榻事
六 珠乃價无量事
七 小面女雜使六事

へ利10
4108
15-14

八 仲敏僧都連歌事
九 大將慎事
十 御堂開白次大勝明尊きぞくの事
十一 三階俊平が才入乃笙術事

佐藤藏書

いまゝそひて海雲法師乃をとり給よ十餘歳だうひ
ゆ童子道よ通ねば法師童よ問てくいてくる仏雪
れ者とろと九仏ゆ者とまろ
ものすてはとゆ法師云法花経はるんくらや
ろへも者れいそく法花経とやらん拙ていまゞ若
神ゞまもきくいそねとや法師まくゆくさくへ乃部房に
くて仏て法花経をしへんとの行へゞ者と伝ゆまくゞゆ
重とやて法師乃法供よ行ゆ墓山の房にれ法き
し法花経を神へ行経をあくよゆどに小僧常に
きくとて拙くくをや誠人と者ゞ法師法師乃く行
つねゆきくる小大法をゆ者とも者ゞ者とやと者と者

らばとやがて五乃云ふ事ありてこの山よりまた行文殊
の所にものがたりとして来行さうと分るにそこへ
ゆきまゐどもに童八文殊といふ事をもたらしてやどれば
なにをも思ひもらしたる法華寺にての行法ゆえ先く女人うを
法ぐくをなうまとあるうをを掛さくけるうをとけうれば
童独人行法ごとにあり毛けるる馬にのうさるる女人のうを
ごとをもうしてうきげるよあれぬこの女人
きうとうれとのるれ口引くさべ乃ゆきもあく
て落ぬくかゆゆるるといれきれくも寺にれ
道にてりよ式るあらさて女うさ法ゆゆるぬ
うらみくいくくとれをゆるをけるをそて死ぬくか

ゆるけうとれをまごをけ紙入てにきく入じ我師
乃女人のかくそくくるかとけ事との給しを
かくれくく其山へうて女乃あり法るあく法花五
よかうりてさ道ゆをみくにをきく入をて物り
ねゆ者道いくくじりをうれ女ハ文殊化して
法ゆ仏法をかよくてあるまとてかえ法をり
さる経よ童八法花経一部をえ終よをりを時
法五の行をくく法花経ををんをてぬ今ハ法師よ
るりて受戒をべしとて法師よけうれぬ受戒を
をうかくべうに東京に禅定寺にいまるる倫法師と
ゆ人と乃法かく面をれ宣旨法かうをりて受戒を

行法人なり。されば人のもとへ行くに受戒あり但今
いまのちとみるまゝきまゝのあるゝ事にてなき法に
とぎるとなり。されば受戒仕ては則法さうにしたい
よ仕ぐし先ゝ行くにかわせいぐと又いらなれば
なりせ行ぐとやせばやせくめれしきおとれるそうそう
ぬきに行さて言とに戒師乃ものとりそうんにいぐ
くこうとに来る人ぐとそく法冷山乃海雲法寺乃
もとこうとやへきるとをへ法くなるくん
をそう法ぬ童行よきくこうれく倫法師乃もとに行
く受戒をべきこうゝやをれぐあんのおくいづくこう
来る人ぐと向をれぐをゝへ行つるあうゝあまぐ

倫法師ぐ法きて出ぐとうをれぐと行ゝとて礼ぬし
くつくく五基山ゝは文殊乃ぐゝ住所あり。安沙
弥を海雲法五乃善知識よあれく文殊をとこうお
ぐみ出ぐまつり来ぐ法ぐとてあるとおまとてかうこふ
事ぬきゝうぬ。さて受戒して文基山へうつて日本に
出るとつる房ぐ出所法れぐとぐて人の住さるをし
ぐ乃ぬ。ゝくくちく山とをうつ法ありけとも法ぬて出
ぬなゝ。あまぐ八優婆夷踊多代弟子の僧ゝこをれ代
ぬよくく女よちぬぐきうあまこいとをあけれども
法よくくゝ女人よちぬ法ぐかるゝゆへ文殊寺ぬ行か
しあきぬあまぐ教化して仏乃よ入ゝわ行あり。

さまざまよ乃人戒狂ぜ侍るべかりけれ
今ハむかし遍照寺僧正寛朝といふ人仁和寺をも
しりければ仁和寺乃破れたる所修理せさせんとて
番匠どもあまた集めて作らせけり日くれて番匠ども
をの〳〵いでゝ乃ちに今日乃造作ハいかほどしたる
ぞと見んとおもひて僧正中ゆひうちしてたかあしだはき
てたゞひとりあゆミ来てあしろどもゆひ
たるしもにたちてあちこちみまハ
るほどにくろき装束したる男乃ゑぼし引
たれてかほさだかにも見えずして僧正乃まへに
出来てついゐて刀をさかさまにぬきてひきそばめて

たてる所によりてなにものぞとあれバ僧正にむかひ
何がしのものとぞ侍りけるかさいざ盗人にて候へ
人よ侍りさむさのたへがたく侍るにそのたてまつり
たる御衣一二おろし申さんと思ひ給ふるなりといふまゝに
とびかゝらんと思ひたる気色なれば僧正ハ事にもあらぬ
ことにこそあんなれかくおそろしげにおどさずとも
たゞこへかしとて身をかはしてぬすびとのしりをふたと
けたりければけらるゝまゝに男かきけちて見えずなりにけれバ
やをらあゆミかへりて坊乃もとちかく行て人やある
とたかやかによびけれバ坊より小法師走りきにけり
まゐり僧正行て火ともしてこよといはれけれバきぬ

そうんと思ふて法師ばらばらとおとの聞こゆるを
小法しそうの坊ばかりあるを世作さうの坊
主ちまいり給へとこうもくつとをれて坊にあるかや
あるゝ僧ども大ともしこの力さまて七八人十人へと
いてきよあるいはくいかぬもとへいさあ ぬるとそこ
きれをきてにぬるうはるぬすびとの気きあをとそ
むこうしいまそていさむうをぬへくかなくて庭
をそうとをそこまはうせぬるうり大ぬるくとり
くかくまはるおとみよとの話をきれをはしそこ
しをもはうはくうれとて出ばうちぬうつかをこ

とみるほとにあるくい乃中にかうつまるとて
そこらかぬかこにてありかこにて人をみ仏け
まを表面をやあうんとかをもうをき紫来
しをうといれくのうりてをれをあるくい乃中
まかうをこはりてんて法くあをうをあくく
うんしかをはうをりてあるをさそにぬきをうけるり
いまをを抱をうをまを法しをうをまて
力をおをうをいれとをうをてひきあをてかう
してくまいるををうりうりて坊よかりてまう
れち花法しをてあ風法り抜くいとけんをを
るうといれくきをうをるきぬ乃中に絵あかう

者ら成ぬきてうせてしまいてうくあるうく
けり
むかし経頼といふ人ありけるに相撲乃家れてこうしたる
河のあるとあるうあり紀のあるたちはるとこうありける
よあるこの川ちかくまのあるとかれいうこうしら
さうきて中ゆれうくあるぐさ紀てくまあり
枝といふものつきかさとうとうてうてうあく
あるときけるうすくまんまそうれあるうあるこうの
まうをしかくのきり測あるくかうしをしてこの
もみもて芸薬れといふものかれまるりまるとけるを
うて汀ちくさそうきあるまのきーいたせ

ようんさあるいかきさそうるうんとうあるたるれ
きるてあるうさあるよきまれなるれまるかうら
あうんとあるかるたるの方れ汀ちあくるりて乃
れとうーいうきうまるまるのうちはるたる大の
むうとさあるよのかんとするうやとうんうそうけ
るあるとに蛇ーうをもまるまてはくくとあるう
きるというるかるまあるあうんとれるたるく汀一只
たうのきてうるちあくうたてうれまれしたるて
かううきるうくてれをうれ入うくきるとさてあれう
れきーーさあるよのうこれきるかるとうんまるあれうる
あるうさまれて水流うれるてのちくうちるもの尾

を行ふとさしあをてゐる方さ海よさ
しせあまをこのこの蛇おしの屋うのあるにてと
くまあをて見さてゐ方紙さしせく
紙頼うをとこに悪さうまをれういうにをん
まを氣にうあらんと思うく光そる法とにまをれえん
くをしくくと引きれさ酒よ引いまんとする氣よ
こてあるとあをまをとうれ切りにをてあをつう
く光そうとをれをいうこうくひくとおよ
にとにををまをるあしく乃を紙あを切り法あき
をとををまをねへをとあをんくあみひをうて立
ををつくく引をも切紙うひう引をれぬくか

かゆる紙あしを法をく者をうて者をあをうに
丈六をんをうあ紙姫をいをて光そう者をよく
引をうと行りのをて法るを風をのをを風をう
紙をを法くに中に無乃をうと紙いる風を法を
をれををれぬるひう光者と光を引をれいを
あをを引をてれをうをは切うれ紙あに光る
尾をひををにをきて光紙をに法あをれをれを蛇
乃あをを光をを光を酒をてをあをふと人のを
をれを酒をうをあをてあをれをををてのを法
をんを光ををれを尾乃ををを光ををあを光を光を
ををうひをと者切をを法をを光を一尺をを

ふるくんとそみくまるるのきれをみきれ尾うさう
きれいあいてうあきて穴のるる長れ根のあけるれれけうく
をあまくあうまくこれくく尾をさう切として巨蛇まと
たくくうるうまとれかるるとて中ちきれけるるめうり
蛇所れまくくれ尾をあうくうんあうあきまるうかく
をなくちをこのれれそといくさうくうれれかにうあけを
て後ろんとそて大明る縄を蛇入まきくるるるつまて
八十人きうさそれをれもれ者ちにくくとそれくく
古十人とあるとかくくとそれうそかたうてかくく
しとそれをるうれをとかうかるる絶教の力いさそ白人で
かるとうちかうをとまるるる尾とかゆるるう

つまくむり　遣唐使乃ものがたりのあるなかに
一　ものをいふ事をてゝ
あきなひとに日本にりんかるこゝ
遣唐使いんようをそ消息ゆるへしきこの子
乳母をれまつんはとはひりへるへしとちきう
くねるしぬ母遣唐使乃くるをとて消息やの
ものとをつぬまとあへくをとものゝ母のきて帳
をとて　乃児をつくれ日本へむきてちごれこれ
りは遣唐使ろまりしかふとりの筒ゆりをてゆろ
をてまくせあるそ親ろ乃中に行逢るんとこれ
さへ海いのをを入くりぬ又ある乳母乃ろの

あんをりよ神乃ろれをあれうかべるゆうりてきん
きれをあちかくけるまれてれぐ童のんをあ法あや
しきを馬ゆれくまれぐいとちかくくりとふくん
ぐをりけるちぐ乃ものろくかりをする涙をつき
くくりれをりるとうちくせてられぐ大けるを奥
乃をけるれのまち侍者ををちていぐきをくせて尺
をかぐくびよれありり遣唐使ろまぐがみとかきり
さくし我よにてあるとをまくく侍ろてりの乳母
児ををくずをて母ろ服をちて海ゝよをぎ入てる
がんあるべき縁ありてかく奥れ乃りてきるるうり
とあくれよかぐくていろうかるりをて侍かく遣

唐使乃つまけあしよつまて仏ようしとかきあう寸ちうけ
きこバ母も今ハたちうのきものに思ひるけうくと知くて
なん布ゐ代まるとうとうあうべきるまてあ乃まゐと
ハしよ姫まくに知ゆてくかきまう魚よくゆしけう
きこうきれぐ名ゐぐ魚養そて法を立ちける
七大ゐ頼ともハまうかきまるあう寸ると
あ意を今ハ世ー新羅國ゆ石ゆくーきうゐ石
ちのいくえうゆとゐまう寸ちう法門ゐに
ときく行く石ゐうくく賜よあうとつまてくゐ
つまてあを二ゐ引あてとき立ちとゐぐ世人意
あうもいくて仏乃ちに石落けるあうかゐうの

目をとゐ意とを立すく法人をゐ一法ゐくきを八
ゐ乃ゐうう東ゐ日本といゐゐあるりうれゐに長
谷観音と中仏ゐ一行まう并の法恵悲ゐの法
まで知ゐ世てきうのー形をうを立てまうい
あどゆくくゆをけ立るをぐーんをて関ゐあさ
まく会ぐ入法ゐどに食乃楊ありの下にそきあれ
とあまゐんあうてゐうまくくくまゐすゐ人乃ゐに
いうの楊みくまで日ゐあるまてゆうれ行ぬのちに石
をちち立てまへゐ寺をゐをゐくく使とさて長
谷ちにゐてきうう法ゐ中に大ゐるすゐかみう
乃麓人ゐうまあう立ゐ歌を会ーー立てまう建

ぞ此世乃人の色よくなしたる家かもぞといひ給ひとなりと
なりけむ
本道をしつま後むかし渡くしれ大事さうしやきとや
拙ありける。乃にある長崎の大事のりしきぞか般
又ありけり乃さうしきを京上りし出家は故宮治殿より
まいりし世又とら久しの来りまする人くもも仏さんと
く唐人よ他に六七子まくらがど借とて古刀銭十腰
そ質にとまる。とあるさて京よ乃ぼりて宇治殿りよ
まつる女狂われの事にいまくそし此人くよ屋うを
してくりりさけるに従よて銀よりける事と之人
またきまかり本道は出事うくれすてまくねきりけ

得どもにさうしありて あきないに出る物どもしらおもきて
られ拙やりふかる乃ものやうぬるども薪ども来る中に玉
をやうふといるもあるをとる人あり人をも
しきらうなる人よ付けるをのこある人にありてりまゐらるど
出てへをとて かをせうんといはまれば縫乃とじまりあをし
風乃おれ大きる豆斗ありきるる銭をうわやしてきをせ
まるとなれぞすずらりける水干をゆるぎて土道に入るく
ん風といはれたれば風のぬしれ男せうとくとさうと
折すれまふに来ものどもれあるまて銀さしき取ちてにほ
なれば今人も出もかくれさるうやと思はれどもぬ
どれいよる道いかうやしと折すかく縫乃出て

そでおとしの手きうへくそでをとけるかかぶりなどして白
うすはたちうちて博奕をうつをとなりよりそのをうを道
をもをあしのわるくまくに拙りしをもて唐人ども
とに賀いすくれりとしでぬいかやくありしれどいそん
とてりをうをもをまじ唐人をも給ふろうべく酒の
をせをどしてをものぐるをしけるをいのむをもられをあ
こトをも唐人りあれくむやうをとりをくをを風腰
ろをもををとをうををくををせをれで唐人をぬをうを
ぬをくををのうへりををきてうちありてみるまくにあ
ををものをとかをれををるかをきをぬをををいをを
ぬをくををのをれば法をとかをれををるかをきをぬ

見をくを十貫をとりをれををれば法をれをくを十貫人にうん
をとりをれををを法ををををを賀をとりをれををうれをを
ををりををんをとりをれををををををををををををををを
やあをんをとれをををををををををををををををををを
をれどをををくををりをれををををををををををををを
ををををををををををををををををををををををををを
をくのををををををを唐人ををををををををををををを
ををりをりをる船ををををををををををををををををを
へををりををををををををををををををををををををを
をりをの屋をりをれををんををの中にををををををををあり
ををををををををををををををををををををををををを

すくこ乃とゑ遊をの中にもちはするものやある
かまへかうづ縫くみへといはれければこ乃さへつる唐
人さしよりいそぎ寄りてこ乃をのこの袖をとらへて
くえはまへ引いてはうまきばさゞゐを海
おとにおやをもちはするとはれそれば宝ふくにさぶ
ぬよう銭つれまゐらばいでかまへのとまへまで稀
乃こしよるまなかはとりけるかぬ銭ばかりこそを節ふして
らせまうたまへまと銭とるまでむかれねふる唐人よ
よ哭まうまとまてうちあらてゑくはまちつても
肉よりつぬ然とりみかあるんとみるほどにさび宝を
う七拾貫うあちれたまゝし太刀ともをとすなうる

とくせまとりけれどさだしげはあきれはてたる顔に
てぞありける吉水干一つにかへつる玉をとりてとく
乃ものはかくべく唐人にまかせてあきれぬべき事を
ぞかし玉乃あたひいとかぎりなき宝物といふ事は今
えだきまぬことにてあらば流れにぬるし
せうまでといふものあるとぞうけたまはりける物人
翁まゐる乃はかのこれ玉やうかといひたくな吉すい
えにひつこせする玉を懐にありとそれはこれしくせ
せまうとけるをされぞたくまへんじようをもちいさ鋭
玉みてぞあらまゐるはいさこいなうとそれまれともね
女さとそれそれしあさ海とさへく抽へいきける銭

そ[illegible]をのこらして家にとりく
きぬ乃あり半法まくに云すさそそうせそそう事る。
ゆまそそ世さのこいせ事をまつき物をすくいくいかごを
物さに三千きをとしするるるといのきれそそのこ
う絹うそれくくいよありそれ物をもて唐にはう
くきるにそ乃ほどかうゆしかりきれども所をも
さそ風くそびまうもおどの為うにくびようきてそあう
けるる悪き風れあきこきれそ唐人にあつき波風りの逆
ぬまそ私乃うちて一乃贅とおうあ物を海よ入る
よこ乃きうすうあ絹うこにはまとはこれそれいせう
もういれきる為うはば物をうみよ入くいつきてそ

うれあるあそ事ぐ系所多ぐうう入そいまこよはそかく
こゆねうりこすすよ人を入あき為うしおうりれ
いこかくいれきる海どにはうしるふまつきこうや
あるときん風ゆ絹りにそれいよ絹うそびく入そるり
よありうれ身の一乃せんそうとはものを大るる物
をうそうるうきれそうきうきうそうまてこう物風
物うるてそあう事る系かくて唐よりつきてあか
そんとはれきる人のすとて私ゆう物このせうす
をうこせてありけ系海どにはよをうてきうあき
まこうそんぎてゆうも絹きれいこ海こにうあん
ぎるとれうるはいきくうるう絹がうてそこ乃

むかしをとこつまどもいとおほくありけるなかに
あるまめなるをみよがりてをとこもせずなりにけり
おとこかりにとていでたちけるあるじのをとこ
ねんごろにいとなみけるをみてかのをとこ
さすがにこれをいとかなしとおもひけるぶんにあるひと
あるこのをとこのやうにてこのうちにけれつるむの
をとこねんごろにあるほどにあるうちのひとにつねにあるまうとも
つとめてこのうしにけるをかのをとこにものいはねどさすがに
いとさびしくおもはれけれどもこのをとこのいへにものいはねどさすがに
ものいはねどさすがにこのをとこのいへにものいはねどさすがに
おとこのいへにものいはねどさすがにこのをとこのいへにものいはねどさすがに

あるときこのをとこのあるじのをとこのいへにものいはねどさすがに
いとしたしくおもはれけるをかのをとこのいへにものいはねどさすがに
いへにものいはねどさすがにこのをとこのいへにものいはねどさすがに
かりにいでたちけるをかのをとこのいへにものいはねどさすがに
方にまかりいでたりけるをかのをとこのいへにものいはねどさすがに
いへにものいはねどさすがにこのをとこのいへにものいはねどさすがに
おとこのいへにものいはねどさすがにこのをとこのいへにものいはねどさすがに
おとこのいへにものいはねどさすがにこのをとこのいへにものいはねどさすがに
おとこのいへにものいはねどさすがにこのをとこのいへにものいはねどさすがに
とあるときにこのをとこのいへにものいはねどさすがに
さるものをいとしたしくおもはれけるをかのをとこのいへにものいはねどさすがに
おとこのいへにものいはねどさすがにこのをとこのいへにものいはねどさすがに
そのをとこのいへにものいはねどさすがにこのをとこのいへにものいはねどさすがに

をとりなりは清くたゞれしをもちあまりつゝんであ
まと云へばかしこにかゝりとなきをとめはあまたて余り
ろくおもはぬ乃ありとにいそぎ行く事ハ志らくなくてされ
深くに迎ふるあまりしもあまりと云へば急ぎあつかひて参
らどにそつまへ参るもあまり参らせいふれあまりさへつ
まする挑そうせてぞ座り参る。さて又乃おもふ乃へして
乃ち唐銭一文をとへば唐のは義深なきのかどりそでをもち
ひろくなり世つぎすりの銭ばかりの段々子ども迄もはへまかり
来るぞ是は右のいふ乃清くも銭がすみかよりはるかくてかさね六千
五ほぐ人へ来るよの銭五万貫にならむとまでは志るすもあ
んなまえざりけれと数多ノ人へさま／＼に参る七拾貫のまたとを

遊してまでときん色をかゞ顔くべかりを見きゝとうそえ
来りと人乃かたりし事あり
お達をいはまへむりし白河院乃清き死女にあつかひて乃
きゝりしよりおかしき紀女あり来るを名残なし六となくハ
ひまる敬と人へどもそれて寄ぞしきりしまるに面ちち
うれなりてつ達ぞ寄り来る日ある人六よれそく
はまりくなくさめんとて役をも座りて六よびもとい
ひそれだにもほくなくなめそてさいりていとらはされ
きあるくさより内乃でいのうさへかゞとてあまりいはされ
がさあられいそできそてあるさへまいり給へと云へばびん
なくいれと云へなし侍後立てめしの云へばびんなくさや

ぬとやて恋ひあるうといへばつきていよいよこれをと
おもひたくはしかどおくいつそせちくいとはいとはいとはれぬ
まてこそいら先さそ紀くも内はていかぐくさいるまぬこ
もいはさぬもいれをまばらのやうくなるくくやぐ
さいつ彩へ屋うそであるくんとせめもれてをちやきき
恋りはいくもめしのそていへばさてさいるこのあるじ
元屋りをれざし刑部禄といふ廳官ゆんれをに
白繋まいはをるがとくさのかうきぬよあ伝穂
知くるづいとをとうあそくくやくとるりくく
あつぎ城物はるるくをりうはぶてうすく
きんをぬうそくいくよいの屋ーくもしかぐくをを

をつそぬをこの廳友いよくをかこまるをてうい
ぶーをうあくーさてあるつきそくぬを廳よ
そまくるにをのうはといへばうまあかをぐーをいふ
いをもにくしうをしかうくをして廳友うは後
へをりりこのあくーうをやはくむるをて部ぬ
あまを見奈りはるくにばいまんむるをとうはうを
ぬをこをそ屋りをれこの六のちれをくくくくをい
をうふうう
をいまをいまををむうくまを道院乃庭をれをくへ
七宗うくくせ行をるををれをはつをくかくこ先
さいくぜんとてからかを僧徳有濱をを慶申して

あるこれをふりよう人のとくさいとあくさをかるが
執のこころ風ぞうあるをもたるをあるを僧とうの風
にうへのとくらハ大童子のをかるをかうとを歌
よしをうをまるをくへをたぞ業ずるほどに仲流
僧都うれをよあるを風流をうをまるを風流をうをまるを
といれををうをあをを僧をかちいうをとうをを
あれををまるに仲流祇園乃法会ををまるをあるを
付をうをまるをこれををのくこと乃連歌をいうに法を
くあるぞとをのれ風にいれあれをまるを仲流をて
やうをまるを連をのうをあるぞかとをれ
をうをまれぞおをまをとやをうを法をくをまるを抱ども一反にをの

とをうをくれをまるをを
二をまををのをはむうを月乃大将星祇祇とをを勅文
をををまをまるをまるをまるをまるをまるをまるをまるをまるを
乃後へをを小短文右大将ををまるをまるをまるをまるを
あるをまを社山階をまるを流をまるを法を行あるをまるを
うを乃をきれを左大将をを祇祇左大将伸平をを人をまを
ぞたをまをまるを左大をまるを法を流僧都公光左大将の法
形乃師をうをまるををめを法行乃をとをうをなをとを法を
をををを法ををを法をを学来ををきを京ををうを祇祇殿
ををををうを殿あれを法ををををををををををををを
とれを法をを僧都ヤはをげるを殿をを衰をををを行を

も左右大将はつゝしみ給へしと天文博士勘申せりとて右大将殿は春日社山階寺などに御祈さまゞに候へバ殿よりもさだめて候はんと思給て案内つかうまつるにさる事もうけ給はらずと候へバおぼつかなく思給へてまいり候つるなり猶御祈候はんこそよく候はめと申せバ左大将の給やうもともしかるべき事なりされどもおのがおもふやうは大将乃つゝしむべしと申なるにをのれもつゝしまバ右大将乃ためにあしうもこそあれかの大将は才もかしこくいますかり年もわかしながくおほやけにつかうまつるべき人なりおのれに

おきてはさせる事もなし年も老たりいかにもなれ何条事かあらんと思へバいのらぬなりとの給ければ僧都ほろ〳〵とうちなきて百万の御祈よりまさるらんこの御心の定にては事のおそれさらにさぶらはじといひてまかでぬされバ実に事なくて大臣になりて七十余までなんおはしける

今ハむかし御堂関白殿法成寺を建立し給てのちハ日ごとに御堂へまいらせ給けるに白き犬を愛してなん飼せ給けれバいつも御身をはなれず御ともしけりある日例乃ごとく御ともしけるが門をいらんとし給へバこの犬御さきにふたがるやう

かるやうに成まつりて内へいまさてまつらせこ
まをまだ伊勢にて車よりをりていらんとし給へい
はれぬまを乗をとられいらんとしをれば
いのさはぬ風くあるまとあらんとて揚をめしてせて
出庭をとうまをて時のよ牛をさいまと給へにつりて
さうまとられば時の刻さいまりまをとかあるを
をつくりとまをづれば給まれば時のまをでうまをれて
中まをかなまをまいまを紙燭咽しまりていれをとるよ
うまをてはいれ越あらかまりくはあくいまを大い通
力乃をのりてつまをりていまりとやせをさてをまを
ハいをくあらうれをまをとの給へば屋くは

とやりて走だうろうかいくはくはくはとやれをか
らせをくを落りよ出入尺だうろと行りまをりまれまを
あん乃まをくを物をまをまりまを出嘉をまをこうちあるをせをく
黄朋る紙拾りてナ文字はりくまをまをりはいれ
くをれを中りはをのもるり朱砂りて一文字
をうりくまを乃屋りよかきまをるだうりよりり時はるの
やうにまを走りまをるをのくをずをを遣廣法
師屋つりまりくをんを新りて尺とんとて懐よ
つを帯紙ををおりををかをうりををりむをびて
咲を誦じうまをて乗をくるまをあげをれば出をを
まをりよまをくまをまりて南城をまをてをれ

いきつまこの乃ち先かちつうんなをとてさいま
とて下の塔さらつまふりよ六条坊門万里小
路をもよりあり立る家乃ちろ切りて乃中へ落
入よりあり別れうと老法師よりてありけるかん
ちとてさいりまつと呪唱乃ゆへと向ふ江堀川右大
臣顕光公乃詰をとへさくに仕りとそきけるころうへを
流罪をとへきれぎも乃麻ばくこがりなあらばとて面伏
うくふりつるさまをべうくばとて本国こうはへをし下
さるるよりまつこ乃顕光ろい死ほよ怨霊と成て出
堂殿をとへ入りつとい成るのされなり怨霊左府と
法名をくたいはよくおぼよせさを行へまるとうん

あるまゝ一ぢ〻まへむきゝ丹後のかゝる階後平といふ
ものあるまゝきりかゝるはなしにありて丹後へ
とてでありあるそまゝ初めくにくに司をあくこと
あるものをたてわきらうとれをとりてはくし
よりまゝ家ほどにあくてもしかくまゝあるものを
唐人の筆下いうくまくあり者りそまゝにあひく
筆をくまゝとなりこんとこれきまゝびそで筆入かりを
入くをしへさうとけふ筆ばそうはもてんくつゝぐ
筆はさいあるりまゝ日本にあるまゝいるにあくし
をん日本にさん筆くをいとしをかくあをを
ありかれしをどしてて唐にまゝくんといまくをしつん

とつれ市まゝだうくまゝにをしへくくのかたよかあく
まゝうをまゝうをまゝうひだいまゝんしまゝてくにあるまゝ
まゝくをまゝ用らまゝてくにあるねあくいまゝんに
まゝくいまゝ唐ようをかまゝせらまゝていうむまんとまゝを
くくいまゝかれまゝまゝまゝはんにうまゝてかよいまゝて
とくへまゝるはしくまゝるにまゝくにくくにくくまゝを
くハ十まゝまゝをまゝるあうはうよりまゝまゝ唐人をい
みくくめくくまゝくまゝはまゝまゝをまゝかまゝまゝど
まんちくまゝくまゝまゝのまゝよまゝはくまゝまゝまゝをまゝまゝを
きまゝまゝとかまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝ唐へまゝまゝと
ひまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝ

てのさんれんのうは病もる人をなぐさめる術
をあつまるこ病をねどもこれをしるしとかな
もれをさきちぐこ後よ物きこころもて術などあるもさ
らにかしこかくさじ君よ法こんとはぜちうにな
よかせんといのちうぶとせてをとられ者きはな
かうは者きてはむまつ一ゆくなどもれぐをえ
ものもを術をば唐へうこんあれ中ゆて法こんむとて
ちくこをを術ぐらくへさうきれもろれ一まを
いむこくをしへざうきうあ法なこくなれつる
命てきりうまにすかよるれをとありてのぐう
者まいうれまをれのうれ唐人きてぐあ

生れぐをいうぐ生ぐ後乃君のう法をありてに
うれのぐうまを行をんをとうるをでいあうんれをれをうう
法人命くぐ法ぐ術ぐ生ふまぐ物ぐをとかぐ出れば
ぐ年にと唐人かをれのくををあのうぐかうてをぐ
きかあをうてを唐へうこんとかりうくのれれき
うをうん術まちつけてをこんとうれきれなうの
ちぐうををあうくして京よれぐりにをう世中乃
ををきまぐ術をにて風のう唐りやをうををま
しをれかれを者ぐ京よのぐうをにきれなをる
をきをんくようれをうを術をて後年人をなぐ術
てせいしをぐ術をれをうしへぐよ年いうぐ術

とあり。この唐人は志やしまで給ふかりなどことをせず
つきを遠ハかねて使かくよて文をかきてうらみかこ
ともなれども斗先生さる部屋乃あるじきふ南になれども
志て称じうきづかなりんやうらみをていわんとかまよ
あるときいひ乃御りていくんあり仁まれじ志だしとを給
きれども、あるとまてあまけりさ和をへハ、唐人え
唐よみくりしさうりてよくみ乃給ひえくもりよきりえて
先んハつくるしことるかけるきの。唐人よみるされ
くろちりハいてくあてものをかりぬやう
りてあるをあきてハ志よびし清所よありてまゐ入
乃君まてねくましてさせるなどとあきとの

りてとしく入るがはしく山るなどにりよれてくださる
きる。あるかたはらかきく女房かえれあ流まりて庚
申志きる夜ご乃入る乃君くまとみまかうきる
ていまてなくうきまなせ。夜ふけ渋まくにねやさ
ぐりて中にりとかくおもつきる女えこ乃いれ字まる
御う。入乃君こそかく南人をありきまのかうり
なども、しとかかはりりく人くえとれぬべうんよおさ
つましはへくえとれそくめ猪さまさんといえられバ
入るをとのまこハ口て流くりて人のとされ給中の
きのうみいるし、給ぶじさえあるそちとをうん
とせよにあしらいりとくまかしぬてまいりてんとい

ひ者まいに拾うこうハせどせどこうハうさんとあるを
さるがく紙しゝ紙ゝうう巻ハ拾ごうるとハさはる
あとまてゝてあゝ巻ハとゆゞこ紙ようとゝそれど
さを、ゆゞこあゝうとゝうハうゝさてまつゝんと物の
なりとゝいハ者まいゞ巻ハ事をそくるとゝうハうゝ
行へいつゝくとせめゝ者まてゝひたゝのあゝん物をちて
巻乃あゝあゝきとゝうへゝいてきゝるとてゝるてゞとをんする
ゞとこれゞ巻ハの巻くゝ後をひきゝてさん紙さ
らくとゝつゞきをれゞゝ巻ハまて紙をて女房をてゝ者まし
れゝゝきゝ者まゝてあるゝうくゝとゝつゞくゝとゝうんひもを
あゞけるゝ紙ゝうくゝを巻ハて巻ハをさゝうくゝとをきゝ

ををゝとあゝうゝをきゝをゝをゝくゝひゝうさ七八ゝをゝうゝ紙巻ハ乃
あゝうきゝ紙一ゝうゝうくゝをゝをゝ巻ハをゝをゝ巻ハをゝうゝ
をゝうくゝをゝうゝ紙ゝてゝをゝ紙ゝをゝをゝをゝをゝうゝ紙ゝて
まゝうんとゝうゝ者まいゞ紙巻ハをゝ紙ゝをゝ紙ゝをゝうゝ
ゞまゝうゝてゝうゝ者まゝれゝるゝゝ紙巻ハをゝ紙ゝをゝ紙ゝて
をゝうゝんゝて紙ゝゝゝゝあゝゝ者まゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゞゝうゝゝの巻ハを紙をゝくゝをゝるゝとゝゝゝゝゝゝゝゝ
紙ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
くゝゝゝゝゝんゝとゝゝ者まいゞゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

おとこ、はしりてゆくに、人々よびとゝめ
さまざまにしてやはまにとゝまりぬれども
なほ、うれつきさけびてゆくを、
さらにもとゝまらじとのゝしりてゆくを
はしりてゆくに、ものゝ
はしりてゆくに、ものゝ
きもをつぶしてあり
へてゝ死にまどひ海にあり
ものゝ
ものゝ
人をとゝめまゐらせんとしたまふを
をつ人をとゝめまゐらせんとしたまふを
いかゞとゝめまゐらせんとしたまふを